

鎮魂としての芸術——草間彌生の1970-1980年代コラージュ作品をめぐって

荒木大(早稲田大学)

本発表では、草間彌生(1929-)が日本帰国後(1973年以降)に制作した1970~1980年代のコラージュ作品を、「鎮魂」という主題に着目して論じる。草間はニューヨーク時代(1958-1972)、モノクロームの抽象絵画「ネット・ペインティング」をはじめ、多彩な実験的表現を展開した。とりわけ路上やアトリエで行われたハプニングでは、参加者の裸体に水玉模様を描き、しばしばトランス状態で集団的に踊り、交わることで、自己の輪郭を溶かし、他者との境界を超えようとする志向が見られた。草間はハプニングの告知チラシにおいて「参加者は自己を忘れ、永遠と一つになる」と記しており、こうした実践は「消滅=始原への再統合」という思想へと拡張されていった。

本発表では、こうした実践が、草間の帰国後も形式を変えつつ継続されていたという観点から考察を進める。1973年以降、草間は抽象的表現から一転して、具象的なイメージを多用したコラージュ作品を本格的に展開するが、この変化は従来の研究において十分に論じられてこなかった。本発表は、ニューヨーク時代のハプニングにおける「自己の消滅と再統合」という思想を基盤としつつ、それが個人的・社会的な死と向き合う形で変容し、コラージュという新たな形式へと展開していく過程を明らかにする。

とりわけ注目されるのは、帰国後の作品において「鎮魂」が中心的主題として浮上する点である。たとえば《君は死んでいます》(1975)では、天上に飛翔する蛾のモチーフに死のイメージが看取されるほか、作品の裏面には草間の父の死(1974年)を追悼する詩が綴られている。さらに《戦争》《無名戦士の墓》《戦争の津波》(「戦争三部作」)(1977)は、戦争によって命を落とした無数の犠牲者への哀悼を示す作品であり、「鎮魂」という明確な制作意図がそこに読み取れる。

こうした流れの嚆矢とみなされるのが、帰国直後に制作された《蟲をとる男》(1973)である。本作には、生前親交のあったジョセフ・コーネルの素材が使用されており、その死(1972年)を契機とする私的な追悼の構造が読み取れる。草間は、かつて他者によって意味づけられた素材を再構成することで、死者の痕跡とともに、自身もまたその内部へと巻き込まれていく。こうした構造は、身体的な参与によって現在の自己を「消滅」させようとしたハプニングの思想を、素材の媒介によって再編成し、継承しようとする営みとも解釈できる。

このように、草間が表現手法として選んだコラージュは、断片の収集と再構成を通じて、失われたものを別の形で呼び戻す再生のプロセスである点において、「鎮魂」の主題と深く結びついている。本発表は、「死者の鎮魂」という主題が、単なる転換ではなく、自己の境界を越えて他者と交錯しようとする一貫した思考の延長線上にあることを明らかにしようとするものである。